

乾癬の免疫反応抑える新薬

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 15 》

皮膚が白いうろこ状になり、フケのようにはがれ落ちたり、赤くなつて盛り上がりたりする「乾癬^{かんせん}」。強いかゆみや痛みが伴うこともあり、生活の質(QOL)は低下する。従来の治療が効かない患者に対し、県立中央病院は新たに認可された生物学的製剤の使用を始めている。

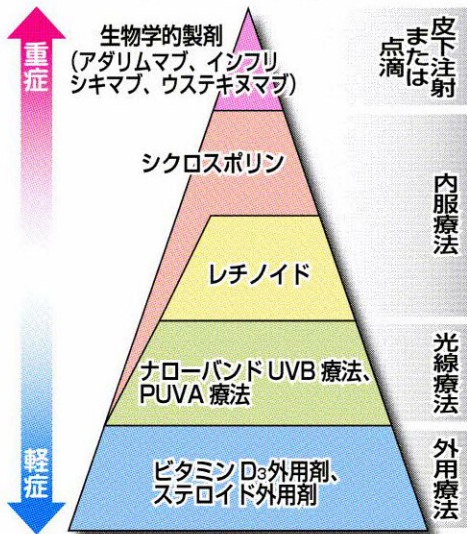
表皮の細胞は通常、1カ月程度かけて新しいものに入れ替わるが、乾癬の患者はこれが3〜4日で起こり、表面は白いフケのような「鱗屑^{りんせつ}」が厚く付着する。さらに、炎症が起こり、毛



塚本 克彦
皮膚科科長

重症でも治療可能に

乾癬の治療方法



細血管が拡張して皮膚が赤くなる。患者は中年男性を中心に千人に1人といわれ、患部が広範囲になると、その見た目が症状以上に患者のQOLを低下させる。乾癬の基本治療は、外用剤(塗り薬)か紫外線照射(光線療法)、内服薬だが、重症の場合、効果が出ないケースもある。新しい治療法は、免疫反応にかかわる特定のタンパク分子を標的とする。

生物学的製剤を使い、病変部で炎症を引き起こす原因となっている「TNFα」「IL12/23」という生体内物質(サイトカイン)をブロックするというもの。全身の免疫反応を抑えるため、結核の有無や症状の重症度などの厳格な使用規定がある。慢性関節リウマチなどの治療にも使われ、比較的安全性は確保されている。

アダリムマブ、インフリキシマブ、ウスデキヌマブの3種類のいずれかを使用し、2週間、3カ月に1回、点滴または皮下注射を行う。高額療養費制度が適用されるが、自己負担は1回10万〜20万円に上る。

治療実施には日本皮膚科学会による認定が必要で、現在県内で治療可能な施設は、同病院と山梨大付属病院(中央市)、山梨厚生病院(山梨市)の3病院。県立中央病院皮膚科科長の塚本克彦医師は「患者さんの状態に合わせた治療法を選択でき、これまで治療をあきらめていた重症例に対しても治療が可能になった」と話している。

(第2、4金曜日に掲載します。次回は23日です)



乾癬患者(50代男性)。生物学的製剤の使用前(左)と1カ月後の患部の様子